

戦後地域婦人会の変遷と現状 ——奄美大島大和村の事例を中心に——

季 慶芝

Post-war Historical Transition and Present Situation of Regional Women's Associations

—A case study of Yamato village in Amami-Oshima—

Qingzhi JI

Abstract

This paper discusses about the women's associations of Yamato village in Amami Island during the post-war period. Especially during the period under the US administration, the women's associations of Yamato village organized many activities in order to reduce the labor burden on women and improve their social status. The rapid economic growth in 1970s and 1980s affected the existing way of regional woman's association. Today, half of the settlements in Yamato village don't have their own regional women's associations partly because many of the women in Yamato village became indifferent to the associations, which is the primary factor that caused the decline of the associations. The changes in the women's lifestyle and the way of thinking along with the changes in social environment of women seem to have caused the problems in the existence and development of regional women's associations. On the other hand, their contribution to the development of women and regional societies could not be denied. Even we could say that the decline of regional women's associations can be seen as a result of the awakening of women's awareness brought by the activities of the women's associations.

キーワード：1. 奄美大島, 2. 大和村, 3. 地域婦人会, 4. 歴史変遷

Key Words：1. Amami Oshima, 2. Yamato Village, 3. Regional Women's Association,
4. Historical process

日本語要旨

本稿は離島である奄美大島の大和村地域婦人会を研究対象に取り上げ、戦後から現在まで歴史的流れの中で、分離期、高度経済成長期、安定成長期と現在の四つの時期に分け、各時期の活動の特徴をとらえ、女性と地域婦人会組織の相互関係について考察を試みる。

歴史的に見ると、戦後初期、特に分離期における大和村地域婦人会は女性の立場を配慮し、女性の労働負担の軽減や女性の地位向上を含め、評価すべき活動を行った。身近な活動を行う婦人会に対する熱意が感じられた時代もあった。しかし、社会の進展に伴い、女性自身の成長や意識の変化も地域婦人会の発展や存続に影響を与えた。現在、役員になりたい人がいないため、大和村における11の集落のうち、約半分の地域で婦人会が組織されていない。大和村の女性の間には、地域婦人

会に対する無関心な態度が窺える。それは大和村地域婦人会の衰退の現状と密接な関係があると思われる。現在、地域婦人会の衰退に関する指摘が多く見られるが、大和村地域婦人会と女性がこれまで相互に影響しあい、地域婦人会が女性および社会の発展に大きく貢献したことは否定できないであろう。女性の生活方式と思考方式の変化が現在の地域婦人会の発展と存続の問題をもたらしたと言えるが、地域婦人会の衰退それ自体は、見方を変えれば、女性自身の成長が地域の網羅性を打破する女性意識の覚醒と見ることもできるであろう。

1 はじめに

日本の地域社会の組織の中には、地域で生活する女性たちが力を合わせ、地縁関係に基づいて結成した「婦人会」という女性組織が数多く存在するようである。「地域婦人会」とは何かという点については、どの研究においても、明確な定義が少ないといえるが、井上は「地縁を機縁とし、一定の年齢の女性によって結成される団体」[井上2011:25]と述べている。地域婦人会の組織構成が地域によって違い、活動目的も広汎にわたるため、厳密な定義を出すのは容易なことではないと思われるが、「地縁」に基づき、しかも会員は「既婚」であることが地域婦人会の共通の特徴だといえる。

調査地である奄美大島大和村の「大和村地域婦人会」¹の場合は、会員はすべて既婚者であり、60歳²で退会する。すなわち、会員である女性たちの共通点の一つは「家庭を持つ」ということである。それ故、子育てや子供の教育、家庭の管理や家庭での介護などを負担しながら、「地域婦人会」という組織を通じて地域社会への義務と貢献も担っている点が、戦後地域婦人会が結成されてから現在までの大和村女性の生活の一面である。

また、1975（昭和50）年に国連が定めた「国際婦人年」をきっかけとして、日本政府も男女平等社会作りの取り組みを始めた。1977（昭和52）年「国内行動計画」の政策に始まり、1985年「男女雇用機会均等法」・「女子差別撤廃条約」の批准、そして1999（平成11）年の「男女共同参画社会基本法」などの施策が実施されたことにより、女性は家庭外に仕事を持ち、働くようになってきた。社会の発展とともに、働くチャンスが男女平等になりつつあったにも関わらず、前述した家庭内の仕事の大半は未だ女性たちが担っているのが実情である。以前と比べて、女性が家庭を出て社会進出を求めたことが、主観的にも客観的にも地域婦人会への参加に影響を与えてきたと思われる。

現地調査を通して、大和村地域婦人会の会員はその殆どが「バイト」の仕事を持ち、家庭、仕事、それに地域活動への参加を同時に背負っている現状が伺えた。つまり、現代日本女性は、社会進出に伴い、女性自身の価値を一定程度で実現しえたとはいえ、女性（特に農村部の女性）が家庭や地域社会に課せられる役割は以前とあまり変わっていないのが現状である。仕事と家庭生活の両立することが、大和村地域婦人会の組織と運営に大きな影響をもたらし、「若年層

1 戦後から、大和村地域婦人会の組織の名称は順次、「大和村婦人会」、「大和村校区婦人会」、「大和村婦人連絡協議会」、「大和村地域女性団体連絡協議会」と変化してきている。名称が変わってきたにもかかわらず、基本的な組織方式や活動の特徴が変わっていないため、便宜上で本稿は「大和村地域婦人会」に統一しておく。

2 地域婦人会会員の退会年齢は地域により違っている。調査地である奄美大島大和村の場合は、地域婦人会長への聞き取り調査により、現在の退会年齢は60歳と決まっている。

の組織離れ」や「役員になりたい人がいない」、「会員の減少」といったことなどが、婦人会組織の衰退を招いたといえる。この点から言うと、現代社会の中で、女性の関心は自身の発展と家庭生活に偏り、婦人会を通じた地域社会への参与への関心は小さくなってきていると言える。

本稿は鹿児島県奄美大島の地域社会の一つ、大和村を調査地に選定し、「昔から地域社会にとって大事な存在でありながら、現在会員の減少」³などの問題を抱えている大和村の地域婦人会について、社会の動きと社会経済の発展状況は地域婦人会の活動と発展に大きな影響を与えられるため、戦後から現在までの大和村地域婦人会の歴史的な変遷と現状を、分離期、高度経済成長期、安定成長期と現在の四つの時期に分けて整理し、大和村地域婦人会の発展の全体像を把握することにより、女性と地域婦人会組織の相互関係について考察するのが目的である。

詳細なデータを手に入れるため、現地での長期滞在（主に2012年10月—2013年3月と2013年8月、9月の二つの時間帯を分けて）により、聞き取り調査を行った。本稿では、インフォーマントへの聞き取り調査から得た情報、現地調査で入手した資料と先行研究をもとに、考察や分析を進める。分析には、主に元会員や現会員からの聞き取り調査、地域婦人会の文集、記念誌、総会の記録などを使用する。なお、関係者の実名は、予め了承を得たうえで本稿に挙げることにした。

2 先行研究

従来の「地域婦人会」に関する研究は、婦人会を社会教育団体として捉えて研究を展開するものが多い。それは地域婦人会が社会教育局に属し、行政機関の末端組織として地域社会に存在する性質とかかわっているためである。代表的なものとして、千野陽一編『資料集成 現代日本女性の主体形成』や三井為友・田辺信一「戦後婦人教育史」、井上多賀子「地域婦人会における地縁団体と学習団体の交点—滋賀県湖南市の地域婦人会を事例に—」などが挙げられる。

そのなかで、井上は地域婦人会が「地縁であり、かつ学習団体である」という特質がある組織であると指摘し、地域婦人会は「地縁団体と学習団体の両面を併せて持つことにより限界が存在」し、「網羅性」の崩れと「自発性」が保障できない状況が地域婦人会の「現在衰退傾向の要因」[井上2011:28]だと主張する。もちろん、地域婦人会の現在の衰退現象は、組織自体の特徴とかかわっているが、会員自身の生活形態や生活意識の変化も地域婦人会を変化させる大切な要因だと思われるため、会員の立場からの分析がみられないと言える。それに、戦後文部省の民主化改革の提唱により、行政の下請けとして成立した地域婦人会は、婦人啓蒙教育の対象であるため、確かに、学習活動は地域婦人会の活動の一環だと思われるが、それだけでは地域婦人会はただ受動的な「学習団体」だとは判断できないと思われる。各地域の実情に合わせて学習を生かし、実践と結びついているのも地域婦人会の活動の顕著な特徴である。しか

3 2012年11月大和村地域婦人会の元会長への聞き取り調査により。

も、実践する女性の知恵と努力、女性自身の成長も無視できないと思われるが、そうした視点での研究はほとんど見られない。

また、近年地域婦人会の衰退の現状について分析する文献もみられ、上述の井上の「会員数の減少、活動への低い参加率、役員に偏る運営」[井上2011:25]を除き、社会教育分野の田辺信一、宇佐川満、三井為友、吉田昇らも地域婦人会に対して、「目的団体ではなく」、「集団の自発性に課題があり」などと指摘するが、歴史的観点から考察すると、地域婦人会が地域社会の発展に大きな役割を果たしたことは否定できない。そして、地域婦人会の存在が地域女性の地位向上に果たした役割も肯定されるべき事柄だと思われる。このような観点から、以上の諸研究には歴史的な視点が弱く、地域婦人会組織自体に対する考察も十分だとは言えない。

本稿の研究視点に近い研究を挙げるとすれば、高木重治の『戦後農村における地域婦人会活動の軌跡－下伊那地域を事例として』がある。高木は「戦後地域婦人会の活動内容の変遷と地域婦人会と小集団との関係性に注目」し、戦後1945（昭和20）年から1970（昭和45）年まで十年ごとに時期を分けて特徴をとらえ、「戦後農村女性の地域社会における活動」について研究を行った。結論として、「地域婦人会は徐々にその活動を縮小させ、活動の中心は小集団へと移行していき、婦人会は小集団の連絡調整機関となっていた」と述べる。研究方法からいうと、婦人会に関する歴史資料についての分析が主であり、現地に赴き、実地調査を行っていない。それに、歴史的な変遷についても、70年代までに止まり、70年代以降、現在までの婦人会の状況については触れていない。高木は第三期である70年代には、「地域婦人会の消滅は本格的に進行」し、「地域婦人会が果たした一定の役割を終えた時期」[高木2013:170]だと指摘するが、70年代から40数年を過ぎた現在も地域婦人会がまだ存在するというのも事実である。高木の研究には地域婦人会の現存する意義が提示されていない。

これまでの研究から見れば、地域社会に注目し、そこで生活する女性により結成される地域婦人会を歴史的な視点からその発展の軌跡と現状を総体的に整理し、社会発展と時代の変遷を背景とし、婦人会を通して地域社会へ働きかける女性の立場から婦人会を論じる研究は乏しいのが現状である。特に離島僻地における女性と女性組織を中心に行う研究はさらに少なく、本稿は離島である奄美大島大和村を研究地として取り上げ、特殊な生活環境の中で生活する地域婦人たちの歴史と現状を地域婦人会の歴史的な発展の整理と分析により究明しようとする。そして、本稿は、地域女性、特に離島僻地に生活する女性に対する地域婦人会の存在の影響を積極的に評価する立場である。また筆者は、地域婦人会は地域社会で生活する女性が地域社会活動に参加できる数少ない場だと考えられるため、地域婦人会の変遷の歴史を地域女性たちの成長史だと考える。社会変化の只中に存在する地域婦人会は、その隆盛期であれ衰退期であれ、会員である女性たち自身の成長や意識の変化により左右されることが多いと思われる。

3 調査地の概要

奄美大島は九州南部の海上にある奄美群島の主要な島である。行政的には鹿児島県に属する。奄美市、瀬戸内町、龍郷町、大和村、宇検村の1市2町2村からなっている。総面積は712km²、人口は65,770人（2012国勢調査）である。昭和30年代以降、人口の減少が続いており、

人口の減少率は県全体を上回っている⁴。

調査地である大和村（図1）は奄美大島の中部に位置し、北岸で東シナ海に面している。明治41（1908）年4月1日、島嶼町村制施行により、大和村が発足。昭和21（1946）年2月2日、つまり「二・二宣言」⁵により、アメリカ合衆国の統治下に置かれ、昭和28（1953）年12月25日「本土復帰」により再び日本国に属する歴史変遷を経て、現在奄美大島郡における村の1つとして位置づけられている。



図1 奄美大島における大和村の位置（Yahoo!Japan 地図により筆者が作成）

面積は約88km²（約大島の10.8%）で、国直、湯湾釜、津名久、思勝、大和浜、大棚、大金久、戸円、名音、志戸勘、今里の11の大字が設置されている。人口は1,646人であり、世帯数は876戸で、男性798人、女性848人が暮らしている⁶。昭和30（1955）年の5,528人⁷から平成25（2013）年現在まで、人口の減少率は70.2%に達する。

4 「平成17年から平成22年の5年間に、（奄美群島の人口が）6.1%減少し」、「県全体では2.7%の減少となり」、「奄美群島の減少率は県全体より3.4ポイント高くなっている」。平成24（2012）年度版『奄美群島の概況』、2012、p 49

5 終戦後、奄美・沖縄等日本本土と行政分離され、「連合国覚書宣言」（二・二宣言）により、北緯30度以南を分離、本土との渡航を全面禁止することを指す。

6 「大和村役場ホームページ」[現在の人口・世帯数]「<http://www.vill.yamato.lg.jp/update/169.asp>」（アクセス：2013年9月13日）

7 1955（昭和30）年国勢調査より。

大和村は「サトウキビ発祥の地」として知られるが、現在サトウキビはほとんど栽培されていない。耕地面積⁸が少ないため、耕地を有効に活用し、スモモ、ポンカン、タンカンなどの果樹を中心に栽培している。

自然観光の面から、環境省の奄美野生生物保護センターや奄美フォレストポリス（森林浴公園）などが観光スポットとしてあげられる。交通の面から見ると、大和村は奄美市に隣接しているが、市街地と結ぶものは県道しかなく、市街地から大和村まで今だに険しい坂道や急カーブが多い。公共交通手段は「道の島交通株式会社」が運営するバスしかない。市街地から大和村の中心地の大和浜まで片道で40分から1時間ほどかかり、村内に住んでいる高齢者たちが主な利用客となっている。

4 戦後大和村地域婦人会の歴史な変遷

4.1 分離期

終戦後の1946（昭和21）年2月2日から、1953（昭和28）年12月25日まで、奄美は本土と行政分離され、米軍政府下に置かれた。奄美大島には、戦時体制の終わりに伴い、「愛国婦人大会大島支部」、「国防婦人会」、「大日本婦人会」などの婦人会組織も終焉を迎え、戦後「大原静子、永田、財部ツキエ、新田らが再興を提唱」し、1947（昭和22）年7月、名瀬市婦人会が結成され、初代の会長は基八重である。これまでの活動として、「引き揚げ者、帰還者の歓迎接待、大原を中心に組織の話し合い、生活研究をテーマにしたグループ活動の開始などがあった」[間2003:305]。1950年代に入ると、奄美大島全島の本土復帰運動が盛んになり、1951（昭和26）年7月25日、三方村婦人会と連携して「奄美大島連合婦人会」を結成し、復帰のため、1951（昭和26）年2月に財部ツキエ氏が渡米し、1953（昭和28）年6月には基八重会長と橋口初枝副会長は本土へ密航して、鹿児島を経由して福岡でルーズベルト夫人に本土復帰について陳情している。

1953（昭和28）年12月25日本土復帰が実現するまで、戦後奄美大島婦人会は名瀬市婦人会を中心として活動をし、戦後直後の活動はまだ戦時中の彩色を帯びているとはいえ、その後民主化の社会の動きの中、活動も「生活改善」、「政庁主催の自主的人口増加抑制のための座談会参加」、「電気料金値上げに反対する意志の表明」[間2003:203]などの生活再建の方向に変えてきた。「本土復帰運動」への参与は政治色が濃い運動であるが、奄美の当時の困窮生活を打開するため、女性たちが力を合わせて社会に踏み出した特筆すべきことであった。

そういう激動の時代背景の中、大和村では、大和村の11の集落を統合させ結成する大和村地域婦人連合協議会が出現する直前に、大和集落が他に先駆けて、1954（昭和29）年に婦人会組織を結成した。その時の活動内容として、「時間励行」と「衛生と整理」をするため、「頼母子」⁹で、時計と戸棚を購入したことがあげられる。その後1958（昭和33）年に、奥タズエ氏が大和集落婦人会長に就任し、連合を図りながら大金久婦人会長の元野浜子氏に声を掛け、

8『奄美群島の概況』によると、大和村は田の面積2km²と畑の面積116km²を合わせて、耕地面積が118km²となっている。平成24年度版『奄美群島の概況』、2012、p10

「大柵校区婦人会」を結成した。以下は奥タズエ氏への聞き取りを基に、成立初期の大柵校区婦人会の歴史を振り返ってみよう。

【奥タズエ氏への聞き取り調査】

奥タズエ，81歳。島育ちで奄美大島大和村大柵集落出身，現在大柵集落に在住。1958（昭和33）年大和村大柵集落婦人会会長に就任。1975（昭和50）年大和村婦人会連合協議会会長に就任。現在短歌同好会の会長と老人会の会長を務めている。

婦人会の歴史について，奥氏は「奄美大島婦人会がまとまる前に，国防婦人会，愛国婦人会が私の小さいときあったんです。戦後奄美は分離しましたでしょう，アメリカの統治下に置かれた。その時私学生だったが，奄美大島婦連が結成されたのです。その目的は，復帰運動のため。軍政府に嫌われたのよ。復帰運動のため小学校の庭に集まって，日の丸を掲げられなかったんで，『君が代』も歌えなかった。婦人会は，ルーズベルト夫人が日本に来るといいう情報が入ったんで，ルーズベルト夫人に陳情書を持っていくために，個人では力にならないから，名瀬市に住んでいる有名な人の，例えば，病院長の奥様とか，大島高校長の奥様とか，そういう有名人を合わせて，基八重さんに初代の会長を，という形で成立した」と述べる。大柵集落婦人会について，「わたくしは昭和33年大柵婦人会長に就任した際に，古い習慣の中で，女性たちの労働負担は重かった。一番負担がかかるのが『お祝い』ごとです。貧しい時代だけど，お祝いだけが豪華だったんです。無駄を省くため，自ら自粛しようと『自粛運動』をしました。大きな反対がでました。昔は核家族ではなくて，大家族です。日本では男が『主』です。男尊女卑で，嫁の立場が弱い。なかなか家を出れなかった。婦人会って嫁の立場が多いでしょう，だから，お祝いの自粛運動で，少しゆとりを持たせようという運動でした。もう一つは学ぶ場として婦人会の活動が必要だと思った時に，大柵集落だけではね，いけないと思うので，大金区も一緒になって活動しよう。大金久婦人会長と話して，大柵校区婦人会を結成していきました。」と述べる。

鹿児島県婦人会連合協議会が編纂する『1958年～1960年鹿児島県婦人会連合協議会研究会集』に収録された奥タズエ氏の『私達の歩み』の中で，当時の活動状況が図表¹⁰で詳しく記されている。

内容から見ると，50年代後期から，大柵校区婦人会の活動が「婦人の労働負担の軽減」，「婦人の素質向上」，「生活質の向上」に集中していたといえる。たとえば，「生活改善」を通して，経済的な負担を減らしただけではなく，嫁の負担も軽減され，ゆとりのある正月を過ごせるようになった。「かまど改良」は，「女は苦勞が多くて，子供を産むだけじゃなくて，お客さんが来る時も，男はお客さんと会して，料理を食べたり，お酒を飲んだりして，女は台所でかまどを行ったり来たり，立ったり，座ったり腰が痛くなるよ。女の苦勞を少なくするため，低くて

9 「無尽講」，「頼母子講」，「模合」などの言い方もある。「日本の金融の一形態である。複数の個人や法人等が講等の組織に加盟して，一定又は変動した金品を定期又は不定期に講等に対して払い込み，利息の額で競合う競りや抽選によって金品の給付を受ける」ことである。「無尽」<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%84%A1%E5%B0%BD>，（アクセス：2013年9月25日）

10 付表1を参照。

座らないと炊事できないかまどを改良して立って炊事ができて、しかも衛生的になったから、女の苦労が減った」と奥氏は言う。グループ活動の展開により、「和洋裁、生け花、衛生、料理、園芸」など、一定程度に婦人の修養が高められた。頼母子で風呂釜や蠅取り器を共同購入することにより、生活を改善することができた。

またその当時、婦人会の活動は行政側が主導だったとはいえ、自主性がかなり高いと思われる。なぜかというと、最初のころ、行政側からの「補助金」はなく、「貯金奨励」や「共同作業で甘蔗・甘藷づくり」により資金を作った。そして、「グループ活動の先生はすべて婦人会の中で選び、無償でみんなに教える」形だったのである。当時は「人数が多いから、いくつも班を分けて」¹¹活動を行なったように、当時の女性たちの積極性や婦人会に対する熱意が感じられ、これは現状と異なるところとして詳しく後述する。

ここで指摘すべき点として、その当時から、婦人会の集会に出席するため、「出席督励運動」がすでに始まっていたことである。その対策として、「朔日遊び日決める定例日」〔鹿児島県婦人会連合協議会1960：14〕を制定した。つまり「月の一日を遊びの日と決め、だから、若い人が気兼ねなく婦人会に参加できるようになった」と奥氏は語る。しかしその時は農業や家事の忙しさのほか、農村婦人の地位の低さと島の婦人の「引っ込みがち」〔ibid.：9〕な性格とが深くかかわっていると思われる。

復帰後、大和村大柵校区の地域婦人会は、戦後の経済的に苦しい社会状況のなか、切実で身近な活動を中心に行なったのである。とくに戦後、地域婦人会が女性の立場を配慮して活動を行なったことは、評価すべきところであろう。

4.2 高度経済成長期

1950年代中期から70年代初期¹²まで日本経済が飛躍的に成長を遂げた。1964（昭和39）年4月1日¹³、大和村の11の集落を連合し、浜崎てる氏を初代会長として大和村婦人会連合協議会が結成された。高度経済成長期に入ると、生活が豊かになってきたため、成立初期の物質生活を高めることを継続しながらも、活動の重点が、徐々に精神面の豊さを高めることに移行してきた。婦人の教養を高めるための「婦人学級」がこの時期、地域婦人会を通じて展開された活動のよい一例である。

11 2013年9月18日奥タズエ氏からの聞き取り調査による整理した内容より。

12 1954（昭和29）年～1973（昭和48）年まで、日本における「高度経済成長期」といわれる。

13 大和村地婦連の結成する時期については、多種多様な説がある。大和村大柵地域婦人会会長と大和村地域婦人連合協議会会長を務めたことがある奥タズエ氏の記憶と『日本復帰運動と地婦連活動』の文章によれば「住用村と同年の昭和三十九年四月」〔奥2003〕であることから、大和村地婦連の結成時期は1964（昭和39）年だと思われる。大和村地域婦人連絡協議会編『平成5・6年度 あゆみ』の中で、大和村地域婦人会連絡協議会の副会長を務めていた元山京氏が書いた文章の『地域づくりは婦人の手から』には、「大和村地域婦人連合協議会……昭和二十八年に設立され」〔大和村地域婦人連絡協議会1994：28〕とある。そのほか、大和村婦人連絡協議会編『昭和62・63年度 第一号 大和村婦連だより』の中に、大和村長を務めていた浜崎嶺富氏の『大和村婦連だより』の発刊に寄せて』には、「終戦後……一年後には村婦人会連合会の結成までこぎつけた」、「あれから40年もたち…」〔大和村婦人連絡協議会1988：3〕の記述から推測すれば、1948（昭和23）年である。本稿では、正式に11の集落を連合して設立され、上部組織の奄美大島連合協議会に加入した大和村地婦連の結成時期を1964（昭和39）年と判断する。

「婦人学級」は1955（昭和30）年「文部省が補助金を出して市町村の教育員会に、婦人学級を開設しよう」[地域社会研究所1968：19]と委嘱し、その狙いは「婦人たちが生涯を通じて勉強を続けていき得るように、しかも自分たちがグループをつくり、自分たちでそれを運営し、自分たちで経費をまかなって、いわば完全な自主グループとして継続学習ができるような状態をつくり出そう」[ibid.: 27]でというものである。学習内容から見ると、一番多いのは「家庭生活」で、約40%を占め、第2位は「子供の教育に関する学習」で18.4%、第3位が、「社会生活に関する学習」で15.7%、その次が「生産、職業などの学習」で9.1%となっている [ibid.: 25]。

大和村は地理的には離島僻地だといえ、本土と都市部の経済発展には差があるため、婦人学級の発足が遅れている。大和村の婦人学級の様子、女性たちにとっての歴史的意義について、インフォーマントへの聞き取り調査と史料の中の記録から分析してみよう。

【政スミコ氏への聞き取り調査】

政スミコ、90歳。大和村津名久集落に在住。

当時の婦人学級について、「月一回公民館でやるのです。その時、婦人が文化を勉強する機会が少なかったのですよ。婦人学級で生け花、料理のつくり方、衛生の問題とか、先生から教えてもらった。料理の実習は夜やったのですから、子供を背負い、寝かしつけながら勉強する母もいたんです。その時はキッチンカーのつもりで、用具を車に積んで回ったんです」と話した。

奄美婦人会連合協議会が編纂する『奄婦連だより 第二十四号』に収録される、戸円婦人会元会長松浦ワカ子が書いた『戸円婦人学級の歩み』の中に、当時の婦人学級について詳しい記述がある。

「田畑の面積も非常に少なく、農業で生計を立てることは不可能で、一家の戸主は県道工事等に出て働き、主婦や娘達はほとんど紬織り」をし、「長い間の念願がかない県道が貫通しましたものの、少しの雨で崩れたり、落石的所があるため、車が不通になることが多く、いまだバスも通らず、部落内の店二軒の自家用車三台のみが名瀬との唯一の交通機関になっている状態で、文化的にもずっと取り残されたへき地でございます。へき地であるだけに、なお新しい世の中の動きに取り残されないようになんとかして教養の向上、生活改善をはかりたい」[奄美婦人会連合協議会1966：34]と、当時の女性たちの気持ちが記されている。

当時の活動は「全体学習」と「グループ学習」に分けて行われていた。全体学習には、「時事問題、保健衛生、栄養学、政治経済、生け花の基礎講義、話し合い」などがあり、グループ活動には、「料理」と「生け花」[ibid.: 39]だけがある。

この時期の大和村婦人会の活動の特徴といえ、前述したように、全国的な経済の高度発展のため、物質不足の時代は過ぎたといえ、本土や都市部に比べて発展が遅れているにもかかわらず、大和村の女性たちはすでに文化修養に目を向け、地域社会の社会教育局の指導を受け、公民館等の公的な機構を利用して自身の素質を高めることを目指すようになってきた。そして、新しい時代に遅れないように、大和村の女性の学習意欲が相対的に高まり、家庭管理や料理の作り方なども婦人学級で身につけるようになった。この時期には、聞き取り調査によると、

「男尊女卑」の意識が以前より薄くなってきたため、なかなか家を出られない状況から少しずつ解放され、女性が家を出て家庭外で活動に参加し、女性同士で話し合う機会も多くなったといえる。

しかし、大和村の場合には、この時期大島紬のブームで、ほとんどの学級生は紬織りに従事していたので、参加率も問題になり対策を講じたことがある。また、地理条件により交通が不便なため、「遠い地域に住んでいる先生に御出を願うことは無理」[ibid.: 35]などの活動の支障も挙げられる。

4.3 安定成長期

70年代¹⁴に入ると、日本経済の高度発展期が終焉期を迎え、前期の経済の高度発展に伴い、奄美大島全島の人口流出が顕著であり、過疎化、高齢化の社会を迎えた、1975年当時、大和村の人口は2,733（1975（昭和50）年の国勢調査）で、1965年当時の4,125（1965（昭和40）年国勢調査）と比べると、減少率は33.7%となっている。低成長の時代背景の下、大和村の女性たちの動きもこの時代の色彩を帯びている。まず、聞き取り調査から説明する。

【伊集院チワエ氏への聞き取り調査】

伊集院チワエ、70代。大和村津名久集落に在住。津名久婦人会元会長である。

「生活を安定させるため、冠婚葬祭の簡素化を提唱、ガス、電気の節電を呼びかけた。ボランティア活動も始まった。55年の時、村婦連活動の一環として各单位婦人会より『おむつ作り』をして出し合い、年一回近隣市町村の福祉施設を役員全員で訪問し、村内の寝たきり老人宅を慰問することなどもやりました。またね、村内には老人ホーム『大和の園』があるので、単位婦人は順次訪問し、手助け、話の相手になり、声掛けなどをみんなでやりました。その活動は現在も続いています」と伊集院氏は語る。

『結成35周年・奄婦連記念誌』に収録した大和村地婦連の元会長である佐藤キミ子氏が書いた『大和村婦連のささやかなあゆみ』のなか、「活動の一環として『おむつ作り』をし、年一回近隣市町村の福祉施設を役員全員で訪問し、また村内寝たきり老人宅を慰問する等定着しつつ」、「昭和62年1月より定期的に活動に踏み切ることになり、村婦連福祉施設訪問実施計画書を作成して、月一回各单位婦人会に流し、会長が責任を持って『大和の園』におられるお年寄りに、よりよく快適に施設での生活を過ごすことができるような趣旨のもとに、園内全域の清掃及び話し相手、声かけ、慰問、あわせて介護術の研修の場とし、活動の充実を図るようにした」[奄美大島婦人会連合協議会1987：53]と書いている。

インフォーマントへの聞き取り調査と史料の記述から見ると、この時期の婦人会活動は地域社会ともっと密接になり、活動の重心が時代の要求に応えるように展開され、自身の修養や家庭生活に対する関心は無論あるが、地域社会の問題の解決に目を向け、奉仕的な活動が出現するのはこの時期の特徴だといえ。1975（昭和50）年に国連が定めた「国際婦人年」をきっかけとして、日本政府も男女平等社会を目指し、一連の政策の取り組みを始めたことに伴い、女性

14 1973（昭和48）年～1991（平成3）年まで、日本における「安定成長期」といわれる。

は地域社会での役割を背負い、地域社会での女性の存在感が日々大きくなってきた。しかし、社会情勢の変化とともにこの時期、大和村地域婦人会の衰退がすでに始まっていた。後に、「組織の強化」と「会員増」は地域婦人会の努力目標となり、「婦人の意識は年々向上しているよう」であるが、「趣味の講座等に熱中する傾向が多く真の社会参加への取り組みが希薄」〔奄美大島婦人会連合協議会1987：序文（ページ数なし）〕であり、大和村では、集落の単位婦人会の村婦連からの脱退や会員の減少など厳しい状況を迎えつつあった。

5 大和村地域婦人会の現状

90年代に入ると、前期の崩壊傾向が続く一方で、1992（平成4）年から、大和村地婦連が「組織の空白状態は九ヶ月続」〔大和村地域婦人連絡協議会1994：28〕いたこともある。その後再組織できたが、幅広く活動を展開するにもかかわらず、組織内部から見ると、会員が熱意を失いつつあり、昔の「網羅」的な組織方式が緩んできたため、地域婦人会の「会員不足」に一層拍車をかけた。会員が義務的な気分で参加するような状況が現在まで続いている。

5.1 現在大和村地域連合婦人会の概況と組織形式

大和村地域婦人会の現状について、現在大和村地婦連の会長である浜崎氏からの聞き取り調査の内容により説明する。

【浜崎通子氏への聞き取り調査】

浜崎通子、50代。大和村大和浜集落に在住。大和村地婦連の会長を務めている。

現時点（2012年）で、大和村婦人会の会員数は約200名である。11の集落の中では、大和浜、湯湾釜、津名久、思勝、大柵、名音の6つの集落しか単位婦人会組織が存在していない。「戸円は過疎化が原因で人数が少ないので婦人会が組織できないから、また、他の集落には、婦人会の役員になりたい人がいないため、婦会はない」と、現在大和村婦人會会長浜崎氏は述べる。組織と活動の形式について、「村婦人會会長は村婦人會役員の間で話し合い、調整によって選ばれる。任期は一年。各集落婦人會会長は婦人會のメンバーの中で一番の年長者に任され、任期は一年。次の年は年齢の下がり順で次のメンバーを指名する」と浜崎氏は述べる。また浜崎氏の話により、「各集落の婦人會はさらに『班』として分けて活動をしている。大和浜集落（浜崎氏が住んでいる集落）を例にして説明すると、大和浜集落婦人會は三つの『班』に分かれ、各班の人数は15人ぐらいである。活動があるとき、一つの班をメインとして活動をして、残る二つの班はサポート役に廻る。メインとしての班は年毎に交代する」ことも分かってきた。

浜崎氏の話によると、現在大和村地域婦人会には、約半分の集落に単位婦人会の組織がないのが現状である。しかも、主な原因は「役員になりたい人がいない」からである。村地域婦人会の役員や各単位婦人会の会長の選出も「話し合い」、「婦人会のメンバーの中で一番の年長者に任され、次の年は年齢の下がり順で次のメンバーを指名する」という義務的な気分になっている。現在活動をするときも戦後初期と同じように、「班」の形式をとっているが、それは、昔は「人数が多いから」であるのに対して、現在は会員の負担をできるだけ軽減することにあ

ると推測される。昔より現在の女性の方に、婦人会に対する無関心さが伺える。

5.2 幅広い活動—2011（平成23）年度活動報告書から—

『大和村平成23年度・活動報告書』から見れば、2011年（平成23年）度は、大和村地域婦人会の活動を「大和村婦人会の組織例会、地域社会のための活動、広域社会との連携活動」の三つの方面で把握できる。

I) 組織例会：

大和村中央公民館で行った。4月26日の「大和村地域女性団体連絡協議会¹⁵役員会」と7月3日の「第58回大和村地域女性団体連絡協議会総会」がある。

II) 地域社会での活動：

(1) 交通安全運動：春の交通安全運動と「交通安全街頭キャンペーン」運動。

浜崎氏によれば、春の交通安全運動は4月の初めから15日まで行う。4月の新学期が始まる時期で、小学生の交通安全のために、朝小学生たちが登校する時間帯と午後学校が終わる時間帯で、婦人会の会員たちは学校と集落を結ぶトンネルの入り口で、交通安全を維持し、小学生たちの安全を守る活動である。また、『交通安全街頭キャンペーン』運動は9月に警視庁の活動と一緒に、交通安全の知識を村民に宣伝するために、交通安全に関するチラシを配布する活動である。

(2) 環境衛生運動：ゴキブリホウ酸ダンゴ作り。

「この活動はゴキブリを駆除するための活動である。ゴキブリを殺すために、各集落の婦人会のメンバーたちは一緒に薬が入っている団子のようなものをつくってから、各家庭に配布する。この運動のおかげで、大和村はゴキブリが一時絶滅するときもあった」と浜崎氏は語る。

(3) ボランティア活動：(特老)大和の園へのボランティア活動。

前に述べたように、大和村婦人会は大和村老人ホーム「大和の園」でボランティア活動を行っている。現在この活動は毎年3回行い、三つの集落の婦人会が交替で担当する。「去年(2011年)は7月の夏祭りの時には大和浜集落の婦人会、9月の敬老会の時には大和集落の婦人会、11月には津名久集落の婦人会が大和の園のボランティア活動を担当した。手作り弁当をもって、老人たちへの声かけ、園内の清掃などが主な内容である」(浜崎氏)。

(4) 他の活動。防災訓練、大和村総合検診手伝い、移動消費生活講座研修会（電話詐欺の防止）などがある。

III) 広域社会との連携活動

(1) 上部組織への学習や研修活動：

奄美大島地区：平成23年度第2回ふるさとを興す大島地区地域女性連学習大会、大島地区生

15 2012（平成24）年11月、浜崎氏への聞き取りによると、1992（平成4）年就任した丸田京子会長の提唱の元、「大和村地域婦人会連絡協議会」の名称を「大和村地域女性団体連絡協議会」と変えた。年齢を問わず、女性であるなら組織に入れる。組織形態や活動内容は変わらないまま、名称だけ変えたため、本稿では、資料から直接引用する場合のほかは、統一的に「大和村地域婦人会」とする。

涯学習リーダー養成研修会、奄美大島地区女性団体連絡協議会研究大会、平成23年度奄美市ふるさとを興す女性大会、第43回徳州地域女性団体連絡協議会伊仙町大会。

鹿儿島県：第43回九州地区結核予防婦人団体幹部講習会、市町村会長会。

(2) 公益活動：複十字シール¹⁶募金活動と平成23年度青少年赤十字奉仕団¹⁷及び大和村赤十字奉仕団合同研修会。

現在の活動を見ると、「多様性」を呈しているのが顕著な特徴である。『大和村婦人連絡協議会報告書』の内容から見ると、現在大和村婦人会の活動は多岐に渡り、子供の教育への重視、環境衛生、社会福祉、広域社会の公益活動まで広がっている。しかし、自然な人口流出による人手不足だけではなく、個人的意識に従い参加したくないことも多くなったため、組織強化が地域婦人会の緊急な課題となっている。この時期の多岐に渡る活動は「役員のなり手が無い」、「会員不足」の大和村地域婦人会にとっては、負担が重いと思われる。

次は、前期すでに現れた特徴であり、すなわち現在大和村地域婦人会の活動が独自の地域密着型活動へ転換する傾向が伺える。『平成24年度 大和村地域女性団体連絡協議会活動目標(案)』からみると、大和村婦人会の活動中心テーマは「ウナグ¹⁸の力で、活力ある大和！～笑顔と絆で支え合い」とあるように、婦人会活動のキーワードは「地域の支え合い」であり、現在、婦人会の活動は主に「地域」を中心とする傾向がうかがえる。上部組織との繋がりや広域社会との連携も存在するが、地域社会での婦人会はやはり地元での活動、地元地域社会に根ざした活動を求めている。これも現状に応える選択であろう。

6 考察

大和村地域婦人会の発展の歴史は大和村地域の女性たちの成長の歴史ともいえる。以下では、これまでの大和村地域婦人会の活動について、歴史的な流れを踏まえて考察を試みる。

まずは、大和村地域婦人会の活動の内容から見ると、婦人会の活動はいつも時代の要求と密着しているのが特徴である。その過程で地域婦人会の活動を行うことにより、女性も時代の流れに巻き込まれてきたといえる。たとえば、戦後高度経済成長期にあたり、当時の経済と生活水準を高めるために展開された「生活改善運動」はその時代の産物だと言える。戦後新しい時代に入って、婦人たちの素養が新しく問われ、婦人たちの地位や修養を高めることを目的に、「婦人学級」の活動も展開された。「生活合理化運動」は日本の経済安定期にあたって展開された活動である。経済不況のなかで、「冠婚葬祭の簡素化」などが提唱され、大和村婦人会のメンバーたちは地域生活の合理化の実現に努力していた。現在は、離島の人口流出、人口の自然

16 財団法人結核予防会が寄付のために作っているシール。

出典：「ウィキペディア フリー百科事典」「複十字シール」<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%A4%87%E5%8D%81%E5%AD%97%E3%82%B7%E3%83%BC%E3%83%AB>（アクセス：2013年9月26日）

17 青年赤十字奉仕団は日本赤十字社にあるボランティアで成り立つ「赤十字奉仕団」のひとつで赤十字の理想とする人道的任務を達成するために赤十字事業の推進及び地域の必要に応じて保健衛生や社会福祉等の向上のために活動している団である。出典：「日本赤十字社 大阪府支部」<http://www.osaka.jrc.or.jp/volunteer/young.html>（アクセス：2013年9月26日）

18 大和村の方言、「女性」の意味である。

減少などが原因で、離島の過疎化や人口の老齢化の問題も顕著になっているが、村内の老人を対象とするボランティア活動は、いまでも大和村婦人会の重要な活動である。

地域婦人会の活動は、公的な機関の提唱の元に展開されてきた活動とはいえ、初期の物質面の改善から精神面の修養を求めることへの転換、そして現在の地域の奉仕活動を行うことまで、時代の流れの中で、女性たちはその都度、自身の立ち位置を見つけ、地域社会で活動の領域を拡大してきた過程でもあったと評価できる。

次に、歴史の発展過程から見ると、大和村地域婦人会の歴史は、会員の数ばかりでなく会員たちの会に対する熱意も下がってきた過程といえる。

その原因として、外部要因と内部要因があると思われる。

外部要因から見ると、(1)社会や経済の変化の側面から、①社会発展による地域経済の縮小と人口減少、現在日本全国が抱えている「過疎化」、「高齢化」の問題は離島である奄美大島でも厳しい状況にある。奄美群島の基幹産業である大島紬の長期低迷などによる本土への若年層を中心とする人口の流出は奄美群島の人口減少に拍車をかけた。2010(平成22)年の国勢調査によれば、人口を15歳未満、15～64歳、65歳以上の3階級に分けてみると、構成比でそれぞれ13.8%、52.6%、33.3%となっている。人口の高齢化は全国的な傾向であるが、経済の高度成長期に若年層が流出し、過疎化が進行した奄美群島の年齢構造は65歳以上の老年人口の割合が高く、その進行が急激なことが特徴である[奄美群島の概況2011:52]。大和村の場合は、人口総数は1955年(昭和30年)が5,528人であるのに対して、2010年(平成22年)の人口総数は1,765人であり、人口減少率は68.1%である[奄美群島の概況2011:55]。人口の自然減少が婦人会の会員数の減少を引き起こしたことは想像できるであろう。また、男女の比較をしてみると、「14歳未満では男性の割合が高いが、15～44歳でその割合は逆転し、女性を上回る男性の群島外流出が生じているためと思われる」[奄美群島の概況2011:52]。つまり、結婚適齢期の男性人口の島外流出は、島内のお嫁さんの人数の減少と婦人会会員の減少にも繋がっていると推測される。②地縁団体から独立した機能団体と多様な社会団体の出現。伝統的には「自治会、町内会、婦人会、青年団、子ども会」などの地縁団体が地域コミュニティの主な担い手であるが、近年社会経済の環境が変化する中で、地域の中で特定の目的を明確に持つ集団が形成されたり、特定目的のための機能が地縁団体から独立したりすることにより、様々な機能団体が地縁団体と並存するようになり、多様化している¹⁹。すなわち、女性たちの場合にも、地域でさらに多くの団体が出現して、選択肢が多様化している。現地調査の中で、奄美地区では、婦人連絡協議会のほか、名瀬市「更正保護婦人会²⁰」、「児童委員会」、「国際ソロプチミスト奄美²¹」、「大島地区生活学校連絡会」など特定の目的の下で活動している女性組織も多く存在している。これらの女性団体の出現と存在は、会員不足の婦人会組織にとって、状況をさらに厳

19 「コミュニティ研究会 配布資料」[総務省HP]「http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/kenkyu/community/pdf/070207_1_sa.pdf」(アクセス:2013年9月26日)

20 組織の目的は「母親としてまた女性の立場から、過ちを犯した人たちの立ち直りを支援すると共に地域の環境浄化に努め、明るいき豊かな社会作りを目指します」[奄地婦連結成50周年 奄女団連結成20周年記念誌 2002:139]

21 組織の目的は「全人類の人権の獲得、特に女性地位向上に努め、奉仕の精神を向上し、真摯なる友情を深める国際理解と世界友好に貢献する」[奄地婦連結成50周年 奄女団連結成20周年記念誌 2002:140]

しくするものになると推測される。

次に、大和村の地域婦人会の衰退を、その内部要因から見ると、社会発展による女性たちの生活様式と思考の変化が主要な原因だと思われる。現在、社会発展と共に、生活形態が多様化し、個人的な生活方式を尊重すべきだと考えられている。婦人会の組織方針も時代と共に変化してきた。「婦人会はその地域に住むことで半強制的に加入しなければならなかった時代を経て、いまや自発的に参加して活動するボランティアとして会員たちに解釈されつつある」[真鍋2005：28]。つまり、婦人会は昔より規制緩和の傾向がある。さらに、大和村『平成23年度活動報告書』から見ると、婦人会の会議と活動は3月から11月まで毎月あり、パートなどの仕事をもちながら子育てもしている若い女性にとって、婦人会に参加するのは確かに自由な時間を制限することにもなってしまう。それゆえ、プライベートな時間を重視し、もっと自由に生活したいと考えて生活している若い女性たちにとって、婦人会に参加しないという選択肢を選ぶことは容易に想像できるであろう。

歴史的な視点から考察することにより、以下のような点が明確になった。すなわち、戦後初期の物質難の社会環境の中、大和村婦人会は、労働婦人の負担軽減や生活改善を目指して身近な活動を行ったが、経済高度成長期になると、女性自身の修養を高めるために「婦人学級」を展開し、さらに安定期における「冠婚葬祭の簡素化」の提唱などの動きを経て、過疎化、高齢化社会に対する活動の取り組みを行なうなど、地域婦人会の活動はそれぞれの時期によって異なり、また、会員女性の社会地位、生活意識や生活様式も時代によってそれぞれ違っているのである。浜崎氏への聞き取り調査の中で分かったように、「役員になりたい人がいない」ため、大和村の半分以上の集落には単位婦人会が組織されていないのが現状であり、大和村地域婦人会に対する女性たちの無関心な態度が伺えた。ゆえに、女性たちの、組織からの脱退が大和村地域婦人会の衰退と密接なつながりがあると思われる。戦後初期、特に分離期における大和村地域婦人会は女性の立場を配慮し、女性の労働負担の軽減や女性の地位向上を含め、評価すべき活動を行った。それと同時に、社会の進展に伴い、女性自身の成長や意識の変化も地域婦人会の発展や存続に影響を与えた。大和村地域婦人会と女性は歴史的な発展の流れの中で、相互に影響しあいながら存続してきたことが究明された。なお現在、地域婦人会自体の衰退に対する指摘が多く見られるが、地域婦人会が歴史的に社会の発展に大きく貢献したことは否定できない。女性の生活様式と思考方式の変化が現在の地域婦人会の発展と存続の問題をもたらしたと言えるが、地域婦人会の衰退そのこと自体は、女性がよりエゴイスティックになり、市場主義に迎合的になったことで、地域社会から自発的に離脱したという面もうかがえるが、見方を変えれば、それも女性自身の成長が地域の網羅性を打破する女性意識の覚醒と見ることもできるであろう。

7 おわりに

本稿は戦後初期から現在までの大和村地域婦人会の歴史的な変遷過程を辿りつつ、分離期、高度経済成長期、安定成長期、現在の史四つの時期に分け、各時期の活動の特徴と女性と婦人会組織の相互関係をとらえた。また、歴史的な変遷過程を追うなかで、地域婦人会と地域の女

性とが相互に影響し合う関係について考察を試みた。聞き取り調査と史料収集を主な手法として、戦後初期の大和村地域婦人会に参加していた会員の思い出をはじめ、現在大和村地域婦人会に参加している会員の声を大切な情報として入手した。それによって、大和村地域婦人会の歴史的変遷と現状について把握することができた。歴史的に見ると、大和村地域婦人会の活動が、地域社会の女性により広い活動の場を提供し、女性の労働負担の軽減や女性の地位の向上に大きく貢献したことは積極的な評価にあたいすると思われる。しかし、時代の進展とともに、大和村の女性の生活方式や生活意識が大きく変化し、それに伴って、女性たちが地域婦人会の活動に対して消極的な態度をみせるようになり、大和村地域婦人会の衰退に影響を与えたことも明らかになった。

日本全国の状況と同じように、大和村地域婦人会も1970年代から衰退してきたといっても、60年を経て、現在でも地域社会で存在しているということも事実である。かつてと比べると、寂しい状況にある今日の大和村地域婦人会に対して、女性たちのなかに、「先輩からもらった宝物だから、続いてほしい」²²という気持ちを抱いている人たちもいるが、今後どんな新たな価値が生まれつつあるのか、地域婦人会の将来の行末はどうなるかということについては今後にも深く探求すべき課題である。それらの課題の解明は大和村の女性の生活像をより深く理解することにつながるであろう。

謝辞：本稿の執筆にあたっては、大和村地域女性団体連合協議会の会長の浜崎通子氏、元会長の奥タズエ氏、政スミコ氏、伊集院チワエ氏、津名久集落区長の森穂積氏から、聞き取り調査のご協力と貴重な資料をいただいた。ここに記して深く感謝を申し上げたい。

参考文献

奄美大島婦人会連絡協議会（編）

- 1961『奄婦連だより』14, 奄美大島婦人会連絡協議会。
- 1962『奄婦連だより』16, 奄美大島婦人会連絡協議会。
- 1963『十周年記念号・奄婦連だより』17, 奄美大島婦人会連絡協議会。
- 1963『奄婦連だより』18, 奄美大島婦人会連絡協議会。
- 1963『奄美大島婦人会活動研究集會集録』奄美大島婦人会連絡協議会。
- 1966『奄婦連だより』24, 奄美大島婦人会連絡協議会。
- 1967『奄婦連だより』25, 奄美大島婦人会連絡協議会。
- 1968『奄婦連だより』26, 奄美大島婦人会連絡協議会。
- 1979『復婦25周年記念・奄婦連記念誌』36, 奄美大島婦人会連絡協議会。
- 1987『結成35周年・奄婦連記念誌』44, 奄美大島婦人会連絡協議会。
- 1991『平成2年度・奄地婦連だより』48, 奄美大島婦人会連絡協議会。

奄美大島婦人会連絡協議会・奄美大島女性団体連絡協議会（編）

- 2002『奄地婦連結成50周年・奄女団連結成20周年・記念誌』奄美大島婦人会連絡協議会・奄

22 2013年9月18日奥タズエ氏への聞き取り調査により。

美大島女性団体連絡協議会。

石田京子（編）

2003『奄美女性たちの戦後史～ヨナリ神の島のヨナリたち～』奄美大島婦人会 OB 会。

井上多賀子

2001「地域婦人会における地縁団体と学習団体との交点」『同志社社会学研究』15：24-41。

石原多賀子

1998「地域社会におけるボランティア・アソシエーションの形成と機能—地域婦人団体の事例研究を中心に—」『北陸大学紀要』12：205-228。

佐藤寛（編）

2003『参加型開発の再検討』『日本貿易振興会アジア経済研究所 経済協力シリーズ』199：165-184。

謝陽

2010「甌島里町「地方嫁」と婦人会活動」『お茶の水地理』47：49-53。

高木重治

2013「戦後農村における地域婦人会活動の軌跡」『戦後地域女性史再考』18：143-176，現代史料出版。

地域社会研究所（編）

1964『コミュニティ—地域社会と婦人』3，国勢社。

1968『コミュニティ—家庭婦人の学習』17，国勢社。

夏目智子

2011「地域婦人会の学びはいつも OJT」『EWEC 実践研究』1：75-85。

間弘志

2003『全記録 分離期・軍政下時代の奄美復帰運動，文化運動』南方新社。

堀口知明

1964「地域婦人団体の成立（1）—特に婦人会を中心として—」『福島大学学芸学部論集 教育・心理』296：29-35。

真鍋知子

2005「市町村合併と地域婦人会：鹿児島県の事例から」『金沢法学』48（1）：1-28。

大和村婦人連絡協議会（編）

1988『大和村婦連だより』1，大和村婦人連絡協議会。

1990『平成2年度・第9回・大和村婦人の集い』大和村婦人連絡協議会。

大和村地域婦人連絡協議会（編）

1994『平成5・6年度・あゆみ』大和村地域婦人連絡協議会。

参考資料

鹿児島県大島支庁（編）

2008『奄美群島の概況・平成20度』鹿児島県大島支庁。

2012『奄美群島の概況・平成24度』鹿児島県大島支庁。

付表1

大棚婦人会
活動内容一覧表

昭和34年度～昭和35年度	昭和29年度～昭和33年度	実 施 年 月 日	
		目 標	
		活 動 内 容	
<p>○研究の場を作る ○環境衛生 (健康教育)</p> <p>○生活の合理化 参加させる爲に</p> <p>○グループ活動</p> <p>園芸生理芸 料生花 衛生花 和洋裁</p> <p>週一回 月金回 夜間 昼間</p>	<p>○校区婦人各戸全員 参加させる爲に</p> <p>○生活改善 ・合同役員会 ・部落常会 ・該当者との懇談会</p> <p>○出席督励運動(朔日遊び日決める定例日) 隣組懇談会</p> <p>・年の祝いの簡素化 ・正月の自粛 ・卒業・入学の合同祝い ・出産祝い ・新築家屋の三回お祝いを一回に</p>	<p>○時間の励行 ○衛生と整理 ○台所改善 ○資金作り</p> <p>○時計購入 ○戸棚(水屋) ○かまど改良 ○甘蔗・甘藷作り(共同作業) ○貯金奨励運動</p>	

今後の計画	昭和34年度～昭和35年度
<ul style="list-style-type: none"> ○ 教養を高める ○ 食生活改善 ○ 環境衛生 ○ その他 	<p style="text-align: center;">環 境 衛 生 (健康教育)</p>
<ul style="list-style-type: none"> ○ 婦人文庫設置 ○ 養豚 養鶏 (特殊活動) ○ 畜舎 便所の改良 ○ 結婚式の改善に特に力を入れる ○ 祝いの合同化 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 風呂釜購入 (頼母子) ○ 蠅取り器共同購入 ○ 水枕 体温計普及運動 ○ 薬剤散布 ○ 月刊誌発行 ○ 子供の躰 ○ グループ活動 ○ 生活改善 ○ 共通号 ○ 毎日貯金 (班別) ○ 共通語 督励運動 <p style="text-align: center;"> 挨拶は共通語で 子供とは共通語で 大人同士も共通語で </p> <p style="text-align: center;">} 努力点をかかげて</p>

付表1 1954 (昭和29) 年から1960 (昭和34) 年まで, 大柵婦人会の活動一覧表 (『私達の歩み』により転載。[鹿児島県婦人会連合協議会1960: 14-15])

季 慶芝

原稿受領日：平成25年10月2日；Received 2 October 2013

掲載受理日：平成25年11月12日；Accepted 12 November 2013